

幼児期における箸の持ち方の実態調査

下岡 里英*, 高原 晶子**

(2022年11月30日 受理)

A Study on the Way of Holding Chopsticks as Infant

Rie SHIMOOKA*, Akiko TAKAHARA**

Keywords: infant 幼児, the way of holding chopsticks 箸の持ち方, observation method 観察法

1. はじめに

現在の多様な食生活により、食事の作法など食文化の継承が危ぶまれ、第4次食育推進基本計画には、日本の伝統的な和食文化の保護・継承の必要性が示されている¹⁾。また、一色²⁾は、脳が著しく発達する幼児において、手先を使う箸を使用することは重要であると述べており、箸を正しく使うことへの教育は文化の継承としての役割のみでなく健やかな身体の発達へも影響すると言える。手指機能の発達面からみると、箸の持ち方は鉛筆の持ち方より発達が遅く、伝統的な持ち方になるのは少なくとも15歳以上であると考えられる³⁾。しかし、成人においても伝統的な箸の持ち方ができない者が一定数いること、また大学生に対する調査において箸を正しく持てる者の多くは幼児期にその指導を受けていたことが報告されており⁴⁾、幼児期からの食具の使用についての教育は重要である。

これまでに、幼児や児童に対する箸の持ち方の実態については複数報告されている。観察法を用いた研究では箸を正しく持てる児の割合について、赤崎ら⁵⁾は幼稚園児、小学生低学年がともに0%、宮丸ら⁶⁾は5歳児で19%、北川ら⁷⁾は5歳児で27.4%、井上ら⁸⁾は5歳児で6%と報告している。質問紙法を用いた研究では、篠原ら⁹⁾は年長児で69.2%、中ら¹⁰⁾は5歳児で76.9%、阿部ら¹¹⁾は小学生で65.2%と示している。一方、横山ら¹²⁾は保護者の箸の持ち方への認識が甘いことを指摘している。専門職による観察法による評価が実態を表すことになると考えると、幼児、小学校低学年で正しく箸を持てる児は多く

ないと想定される。

また、箸の持ち方の評価は研究により異なる。赤崎ら⁵⁾は正しい箸の持ち方（以下、「伝統型」と示す）以外を4つの型で区分し、さらにそれぞれの型について箸が交差する型に細区分した合計8つの型としている。宮丸ら⁶⁾は伝統型以外を9つの型に、上原ら¹³⁾は伝統型以外を5つの型に区分している。伊与田ら¹⁴⁾は箸の持ち方を4段階に区分し各段階を細分することで合計13区分に分類している。

そこで、本調査では、幼児に対して観察法を用いて箸の持ち方の実態を調査するとともに、伝統型以外の箸の持ち方がどのように区分できるかを検討することを目的とした。これが食具に関する食育の方向性を検討する上で、重要な情報になることを期待する。

2. 方法

調査は2021年10月、2022年6月、10月に行った。対象は広島市内A保育園の年長児とし、2021年は20名、2022年は35名に対して実施した。なお、2022年は同一園児について6月と10月の2回調査を行った。園児には、各自3cm角に切ったスポンジ15個を、箸を使って紙皿から紙皿に4分間連続して移動させることとした。その間に同保育園の管理栄養士が1人の園児に対して複数回観察を行うと同時に、園児の箸の持ち方の様子を動画で撮影し、映像からもその評価を行った。園児に対する箸の持ち方の食育は、両年、園の管理栄養士により10月以前に1回実施している。本調査研究は広島女学院大学倫理審査委員会の承諾を得て行った。

* 広島女学院大学人間生活学部管理栄養学科教授

** 社会福祉法人ともえ福祉会ともえ保育園管理栄養士

3. 結果および考察

(1) 箸の持ち方の区分

箸の持ち方の区分は、上の箸を主に支える指を基準に行った。指の名称は、母指、示指、中指、環指、小指で表す。箸の持ち方の区分は、「伝統型」、「母示中型または母示中クロス型」、「母示型または母示クロス型」、「母中型」、「示中型」、「母示中環型」、「持てない」とした。「母示中型または母示中クロス型」は、二本の箸のうち上の箸を母指、示指、中指で支える型とし、「クロス型」は箸の使用時に二本の箸が平行にならず交差するものとした。「母示型または母示クロス型」は上の箸を母指、示指で支える型とし、二本の箸が使用時に交差する場合にクロス型と細分した。「母中型」、「示中型」、「母示中環型」はそれぞれ上の箸を支えている指の名称を用いて区分した。「持てない」は箸を五指で握ったり、食具として使う

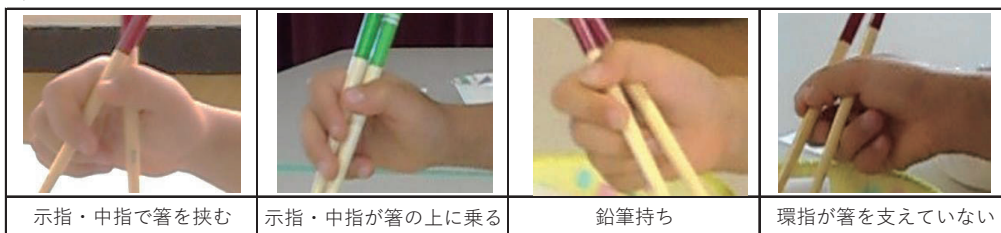
動作ができない様子の総称とした。この基準で区分した型を図1に示す。

伝統型以外の持ち方についてさらに詳細にみる。一色²⁾は正しい箸の持ち方として、上の箸を持つ母指の先が示指の第三関節に軽く固定することと中指の爪の横を箸の腹にあてることとしている。また、下の箸は環指の爪の横にあて母指と示指の股に挟み込んで固定するとしている。本調査での「母示中型」は上の箸を支える指としては正しいが、指の位置や支え方が適切ではなかった。具体的には、上の箸を示指と中指で挟み込む様子や、上の箸の上に示指と中指がともに乗っている様子、鉛筆を持つように上の箸を持っている様子がみられた。また、母指、示指、中指による上の箸の持ち方は適切であるが下の箸を環指が支えていないという持ち方もみられた(図2-a)。「母示型」は上の箸を支えるはずの中指が下の箸の



図1 箸の持ち方区分

a) 母示中型



b) 母示型

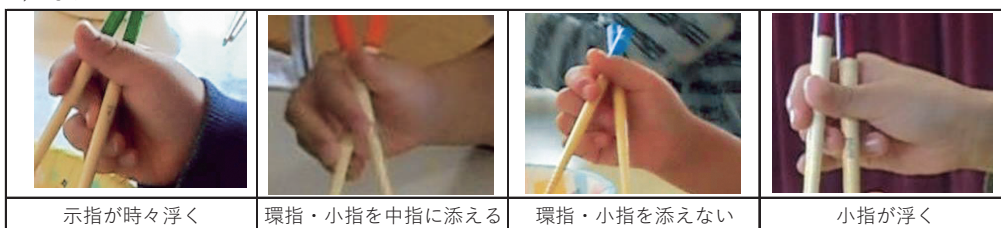


図2 母示中型および母示型の細区分

上や下に添えられている状態であった。上の箸を二本の指で支えるため箸が交差するクロス型が多くみられた。中には示指が時々浮く様子もみられた。また、環指や小指を下箸ではなく中指に添えたり、浮かしたり、握り込んだりする様子がみられた（図2-b）。「母示中環型」では、小指が浮く場合と浮かない場合がみられた。赤崎ら⁵⁾は、「母指、示指、中指で持つ型」や「小指を除く四指を使うが上の箸が動かない型」を区分として用いているが、本調査ではこの2種類に該当すると思われる持ち方であっても指の位置に複数の種類があった。また、上原ら¹³⁾は、「箸にぎり型」や「箸交差型」を区分に用いており、本調査でもこの型はみられたが、両者とも指の組み合わせが複数観察された。また、本調査では指の位置で主に区分を行ったため、同じ区分であっても、伊与田ら¹⁴⁾が示す持ち方の発達段階での違いが生じた。今後は母指の添え方や発達段階も含めた区分で整理していくことが、子どもの発達状態に即した区分につながると考える。

（2）箸の持ち方の実態

1）2021年度と2022年度の比較

2021年と2022年の年長児について箸の持ち方を比較した（図3）。伝統型は10%あるいは14%であり、これまで報告されている研究結果⁵⁻⁷⁾と類似した結果であった。「母示中環型」については同程度の割合であったが、「母示中クロス型」が2021年度のみでみられた。4分間という限られた時間内の観察であることから、偶然「クロス型」になった、あるいはならなかった可能性もあり、引き続き検討が必要である。

2）2022年度の経時的変化

2022年6月と10月の変化を図4に示す。4か月の間に「伝統型」が、1名から5名に増えた。園児別の変化を表1に示す。10月期に「伝統型」であった5名のうち1名は6月期も「伝統型」であった。残りの4名は6月期に「母示中環型」であった者が1名、「母示型」であった者が2名、「母示クロス型」であった者が1名であった。6月期に「母示中環型」であった1名は環指、小指が使えていなかったが10月期には「下の箸」を支えるようになって

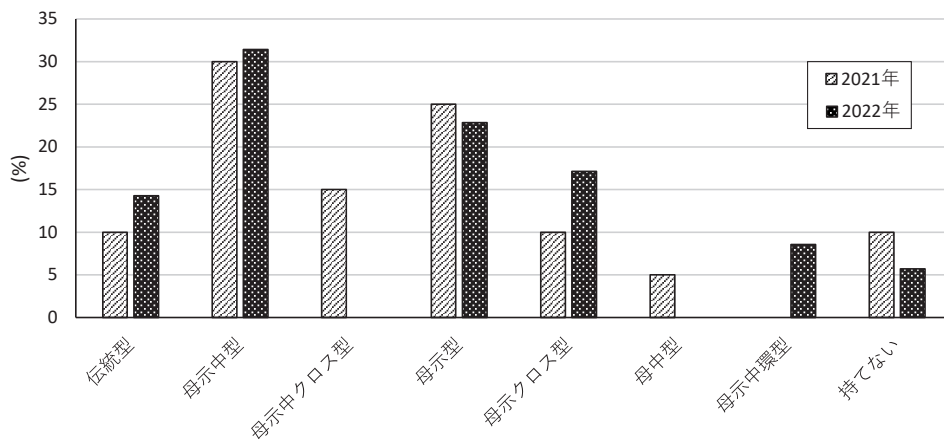


図3 箸の持ち方区分別の分布割合（年次変化）

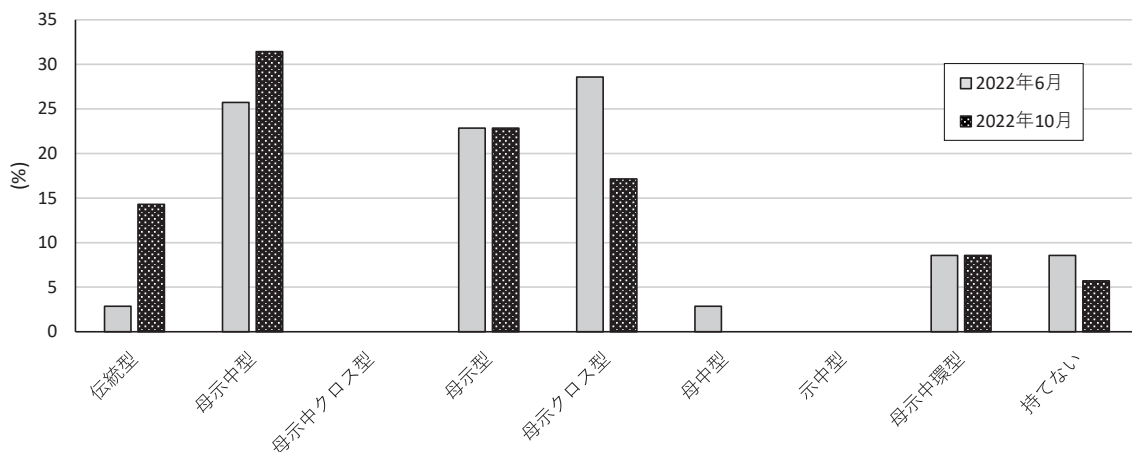


図4 箸の持ち方区分別の分布割合（経時変化）

表1 園児別箸の持ち方変化

6月期 10月期	伝統型	母示中型	母示型	母示クロス型	母中型	母示中環型	持てない
伝統型	1	1	2	1			
母示中型		7	2	2			
母示型		1	4	1	1		1
母示クロス型				6			
母中型							
母指中環型						3	
持てない							2

(人)

「伝統型」となった。6月期に「母示型」,「母示クロス型」であった3名は「下の箸」に添えていた中指を10月期には「上の箸」に添えており「伝統型」になった。次に,「伝統型」以外で持ち方が変化した児の様子を示す。6月期に「母示中型」であった1名が10月期には「母示型」になったが,これは中指が「上の箸」の上から「下の箸」の上に移行するという変化であり,中指の位置が「伝統型」に近づく変化と捉えた。6月期に「母示型」であり10月期に「母示中型」になった2名は中指の位置が「下の箸」から「上の箸」へと移動し「伝統型」に近づく変化と捉えた。同様に,6月期に「母示クロス型」で10月期に「母示中型」になった2名は,中指の位置が「下の箸」から「上の箸」へ移動し,「伝統型」に近づく変化と捉えた。6月期に「母中型」,「持てない」であった児が10月期に「母示型」になったことは示指の機能の発達と考えた。つまり,6月期から10月期にかけて持ち方が変化した児は全て「伝統型」に近づく変化と整理した。2022年7月に園の管理栄養士により箸の持ち方に関する食育が1回行われている。その際,「伝統型」の持ち方の説明として「中指は上の箸と下の箸の間」と表現している。これにより,園児の箸の持ち方が変わった可能性はある。さらに,上の箸を「中指の爪の横」にあてる²⁾というより具体的な位置を示すことも効果があると推察できる。今後の食育で実践して効果を検討したい。

4. まとめ

幼児(5歳~6歳)を対象として,箸の持ち方を観察した結果,「伝統型」の持ち方ができる児は10%あるいは14%であった。手指機能の発達に合わせながら,指のどの位置でそれぞれの箸を支えるのかを具体的に教育していくことが必要である。そのためにも,箸の持ち方の評価では,どの指で箸のどの部分を支えているかにより区分すると分かりやすいと考える。その上で特に中指の位

置や母指の添え方とともに,発達段階を含めた整理を行い,個々に合わせた支援を考えることが必要である。

謝辞

本調査を行うにあたり多大なるご支援を賜りました坂本智恵園長先生はじめ保育士の先生方,保育園の皆様,並びに調査にご協力を賜りました園児および保護者の皆様に厚く御礼を申し上げます。また,情報収集にあたり多大なるご協力を賜りました広島女学院大学人間生活学部管理栄養学科の川本恵瑠さん,中谷美結さん,山本朱莉さんに厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 農林水産省:第4次食育推進基本計画(2021), <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kannrenhou-24.pdf>, 2022.4.14アクセス
- 2) 一色八郎:箸の文化史, 御茶の水書房, pp. 172, 213, 1990
- 3) 立屋敷かおる, 山岸好子, 今泉和彦:小中学生における箸の持ち方と鉛筆の持ち方の関連, 日本調理科学会誌, 第38巻第4号, pp. 355-361, 2005
- 4) 山内知子, 小出あつみ, 山本淳子, 大羽和子:食育の観点から見た箸の持ち方と食事マナー, 日本調理科学会誌, 第43巻第4号, pp. 260-264, 2010
- 5) 赤崎真弓, 小清水貴子, 元田美智子, 松野絵理, 中路知恵, 林明子, 小濱有里子:幼児期から学童期における子どもの食生活に関する実態把握—箸の持ち方調査を通して—, 長崎大学教育実践総合センター紀要, 第9号, pp. 129-138, 2010
- 6) 宮丸慶子, 新澤祥恵, 中村喜代美, 田中弘美, 坂井良輔:保育園児の食生活の実態とその課題(その5)—箸の持ち方に関する研究—, 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 第6号, pp. 219-225, 2013
- 7) 北川千加良, 渡邊智之, 森岡亜有, 末田香里, 酒井映子:園児の食育行動目標としての箸使いに関する要因,

- 心理科学, 第9巻第1号, pp. 9-17, 2017
- 8) 井上えり子, 森田安奈: 子どもたちの食環境と食教育—箸づかいの実態と支援学習—, 京都教育大学環境教育研究年報, 第16号, pp. 77-89, 2008
- 9) 篠原久枝: 幼児期の食育に関する一考察—箸の作法を中心に—, 宮崎大学教育学部紀要, 第95号, pp. 165-178, 2020
- 10) 中俊博, 木村博子: 幼児の生活行動調査と活動性の発達, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 第12号, pp. 119-127, 2002
- 11) 阿部芳子: 子どもの箸使いと食行動, 相模女子大学紀要, B, 自然系第73巻, pp. 11-21, 2009
- 12) 横山英吏子, 今里衣, 福地香代子, 鳴瀬彰子, 鈴木千夏, 南道子: 東京学芸大学付属学校研究紀要, 第47巻, pp. 89-96, 2020
- 13) 上原正子, 大場和美, 加藤象二郎: 箸の持ち方・使い方の発達段階別の差異, 瀬木学園紀要, 第8巻, pp. 7-15, 2014
- 14) 伊与田治子, 足立己幸, 高橋悦二郎: 保育所給食の料理形態との関連からみた幼児における食具の持ち方および使い方の発達の变化, 小児保健研究, 第55巻第3号, pp. 410-425, 1996